

## 【本園の研究主題】

身近な環境に関わり、やり抜く力や協調性をもった幼児の育成  
～ 評価からの保育改善を通して ～



## 1 主題設定の理由

## (1) 幼児の実態

- ・様々なことに自信がないため、自発的な行動力や挑戦意欲が低い幼児が多い。
- ・自分の思いばかりを主張し、様々な人と関わって楽しむ経験が不足している。

## (2) 教師の願い

- ・遊びや活動に目的や目標をもち、友達と協力しながら、活動を楽しめるようになってほしい。
- ・職員間で指導のプロセスを振り返り、保育改善していくことで、「やり抜く力」や「協調性」を育みたい。

## 2 研究のねらい

評価からの保育改善を通して、幼児のやり抜く力や協調性を育成するための環境の構成や援助の在り方を探る。

## 3 研究の仮説

- 幼児が身近な環境に関わる中で、試行錯誤を繰り返したり目的や目標をもって取り組んだりすることで、失敗してもくじけず、やり抜く力が高まるであろう。
- 友達と協力したり気持ちを考え受け入れたりしながら活動することで、折り合いをつけることができ、協調性が育まれるであろう。



## 4 研究の内容

## (1) 基本的な考え方(キーワード)

- ① **やり抜く力** 「GRIT」困難に立ち向かう力・失敗してもくじけない粘り強さ・自ら取り組む積極性・最後までやり遂げる力 【参考:アメリカ心理学者アンジェラ・ダックワース, '究極の能力'】
- ② **協調性** 相手の気持ちを考え受け入れながら、同じ目的や目標に向かって取り組むこと。
- ③ **評価からの保育改善** 幼児の発達する姿を捉えることと、それに照らして教師の指導が適切であったかどうかを振り返り評価することの両面について行う必要がある。【引用:幼稚園教育要領解説】

## (2) 実践の内容

- ① 職員研修の充実 『やり抜く力』と『協調性』について、KJ法(※脚注1)を用いて理解を深める(令和5年7月)
  - 《方法》ア 幼児の遊びや活動から、やり抜く力と協調性が見られた場面を付箋に書き溜める。
  - イ 付箋に書いた内容を説明し合い、グルーピングする。
  - ウ グルーピングを基に話し合い、職員間で共通理解を図る。

## 本園の幼児のやり抜く力と協調性が見られた場面(一部抜粋)

- ・目的や目標に向かって活動を進める。(給食の完食・廃材製作の完成・夏祭りに向けてのゲーム作り)
- ・繰り返し試す。(夏祭りに向けてのゲームの完成・水に顔をつける。)
- ・友達と相談したり協力したりする。(遊びのルールを考える。困っている友達に気付き、手伝う。)
- ・友達とよさを認め合う。(絵画を褒める。友達の考えに共感する。)

## &lt;考察&gt;

- ・幼児が困難に立ち向かう場面が少ないため、教師が意図的に困難な場面を設定することで、やり抜く力の育成につながる事がわかった。
- ・やり抜く力は、大きな困難を乗り越えた時に育まれると捉えがちであったが、一人一人の小さな変容を見逃さず、日々の遊びや活動での成果をスモールステップで認めていくことの大切さに気付くことができた。
- ・幼児のやり抜く力と協調性について職員間で意見を出し合ったことで、新たな着眼点等に気付くことができ、理解を深めることができた。また、二つの力の育むための援助や課題を見出すことができた。



② 評価に生かすための、‘めざす幼児の姿’の表作成と活用（令和5年6月～）

《表の作成と活用の方法》

- ア やり抜く力と協調性を育成するためには、どのような幼児の姿を目指していったらよいかを職員間で話し合い、『玉造幼稚園のめざす幼児の姿（やり抜く力・協調性）』の表を作成する。
- イ 1学期終了後、表を基に幼児個人とクラス全体について評価をし、評価内容や幼児の実態を基に、2・3学期の項目内容を改善する。
- ウ イと同様、2学期終了後に評価し、3学期の項目内容を改善する。（※別添資料1）



<考察>

- ・やり抜く力と協調性についてのめざす幼児の姿を具体化・可視化したことで、職員間で評価の観点が統一され、幼児の成長面や課題点への理解が深まった。
- ・一般的な4歳児・5歳児のめざす姿ではなく、園の幼児の実態に合わせた内容で設定し、学期ごとに評価・改善していったことで、教師の具体的な援助が見出せ、やり抜く力や協調性を高めることにつながった。

③ 保育実践

- ア 事例1 ぐるぐるタイフーン作戦会議&協同画製作（チームでの話し合いを通して、考えを深め合いながら友達と協力して進めることができた事例） 2年保育 4歳児5歳児 9月～10月

○幼児の姿

◇幼児の内面や育ち

・評価 改善方法（★環境の構成 ※教師の援助）

【ぐるぐるタイフーン作戦会議 9月上旬～10月上旬】

- チームの友達と走るペアや順番を話し合う。
- 話し合ったことを実践する。
- 2チームで対戦する。
- 変えたほうがよいところや新たな意見を出し合う。

- ◇自分の考えを言葉で伝える。
- ◇友達の考えを認め、共感する。
- ◇考えを深める。
- ◇勝った喜びや負けた悔しさを味わう。
- ◇チームの絆が深まる。

- ・初めは、作戦会議がどのようなものかわからず、意見が出づらいうでであった。
- ※意見を出しやすいよう、ヒントや例えを提案する。
- ・友達の考えを聞いたり実践したりすることで、チーム全体での思考力や団結力が深まった。
- ・友達の考えに共感し、認め合う姿が増えた。
- ・5歳児は、チームをまとめようとする力が育ってきた。
- ★チームでの活動が楽しかったという意見から、チームごとの協同画作りの活動につなげる。



【協同画製作 10月中旬～10月下旬】

- チームの友達と描きたい物を話し合う。
- 完成予想図を作る。
- 分担しながら、絵の具やクレヨンで描く。
- 装飾や付け足す部分等を話し合う。
- 絵の題名を話し合って決める。

- ◇友達と思いや考えを共有する。
- ◇見通しをもって取り組む。
- ◇友達と協力し、役割を分担する。
- ◇完成への期待が高まる。
- ◇完成した達成感を味わう。

- ・作戦会議に比べて、幼児にとって身近で取り組みやすい活動であったため、様々な意見が出ていた。
- ★5歳児が話し合いを進める場を設け、自分たちで活動を進める充実感を味わえるようにする。
- ※教師は見守る姿勢を大切にし、言葉をかけすぎないようにする。
- ・完成形がはっきりしているので、次にやるべきことや終了までの時間等、今後の見通しがもちやすい。
- ★完成した物は、幼児が見やすい場所へ展示し、達成感や充実感が高まるようにする。

<考察>

- ・4歳児と5歳児での話し合いは、様々な友達の思いに触れたことで、新たな発想が生まれ、幼児自身が考えを深めながら活動することにつながった。
- ・友達と相談した内容を実践することで、自分たちの考えや行動を肯定的に捉えることができた。自信や達成感につながり、自分たちで活動を進めることができるようになった。



イ 事例2 こわこわお化け屋敷を作ろう（遊びのイメージを広げながら、友達と共通の目的に向かって意欲的に活動することができた事例） 2年保育 4歳児5歳児 11月～12月

○幼児の姿

◇幼児の内面や育ち

・評価 改善方法(★環境の構成 ※教師の援助)

【こわこわお化け屋敷作り 11月上旬～12月上旬】

- ハロウィンパーティーやダンスを楽しむ。
- お化け屋敷のイメージを話し合う。
- 大きな段ボールに黒画用紙を貼り、手形を付ける。
- お化けの衣装を作る。
- 装飾用のお化けを作る。
- 完成した物や翌日の活動について話し合う。

- ◇友達とイメージを共有する。
- ◇試行錯誤を繰り返す。
- ◇役割を分担する。
- ◇イメージを表現する。
- ◇友達と頑張りを認め合う。

・衣装やお化け作りは、どうやってよいのかわからず、思うように進まない幼児もいる。  
※見本を用意したり、幼児と共に作り方を考えながら進めたりして、幼児自身が試行錯誤しながら作れるようにする。  
・全員での振り返りの場を設けて、作った物や困ったこと、今後の活動について話し合うことで、完成のイメージや今後の見通しが共有され、共通の目的に向けて気持ちを合わせて進めることにつながっている。  
★発言する幼児に偏りが見られるため、教師が意図的に指名して発言を促す。  
★継続して活動できるように、空き教室を利用し、広々とした空間を確保する。



【お家の人をご招待<保育参観> 12月14日】

- 期待が高まっている。
- お化けの衣装を身に付け、お家の人を驚かす。
- 自分たちで決めた役割分担で、活動する。
- 友達と活動の成功を喜び合う。

- ◇活動意欲や期待をもって活動に取り組む。
- ◇やり遂げた満足感や達成感を友達と共有する。
- ◇自分たちで積極的に活動を進める。

・『お家の人を招待して、驚かせたい。』という幼児の願いが実現したことで、やり遂げた満足感や充実感を味わうことができ、幼児の自信にもつながった。  
★保育参観後も遊ぶ時間を十分に設ける。その後、幼児と共にお化け屋敷を解体することで、遊びの区切りをつけることができるようにする。

<考察>

- ・毎回、活動の最後に全員での振り返りを実施したことで、完成のイメージや今後の見通しを共有することにもつながり、共通の目的に向かって活動を進めることができた。
- ・コースの壁面に手形を押ししたり、装飾や衣装を作ったり等、様々な活動を設けたことで、自分の取り組みたい活動を見つけやすく、積極的な姿が多く見られた。また、友達と役割を分担しながら活動することにもつながり、協力して活動を進めることができるようになった。



5 成果と今後の課題

(1) 成果

- OKJ法での職員研修を行ったことで、やり抜く力と協調性の育ちを見る力が養われ、二つの力を高めるための援助や具体的な課題を見出すことができた。
- めざす幼児の姿を明確にしたことで、評価の観点が統一され、一人一人の幼児の成長面や課題への理解が高まり、幼児の実態に合わせた援助を見出すことができた。
- 幼児が試行錯誤を繰り返したり目的や目標をもって取り組んだりできるよう環境を整えたことで、スモールステップでの達成感や満足感を味わえるようになり、失敗してもくじけず最後まで取り組めるようになった。

○4歳児と5歳児混合での活動を多く取り入れたことで、様々な思いや考えを受け入れ、友達と折り合いを付けたり、協力したりして活動を進めることができるようになった。

## (2) 課題

○興味や関心が薄れやすく、じっくりと遊び込むことが難しい幼児もいる。幼児自身で遊びを継続できるような手立てとして、挑戦意欲を高め、試行錯誤したくなるような教材や場の設定を工夫する。

○めざす幼児の姿を作成したことで、教師の評価意識が高まった。今年度は、学期ごとに評価・改善していったが、幼児の成長をより適切に評価・改善するために、次年度は月毎に見直しをする。

○より一層多面的に幼児の育ちを見るために、職員研修の回数を増やし、事例検討をしたり新たな手立てを積極的に実践したりして、援助の工夫・改善に努める。

※I KJ法…思いついたキーワードや情報をカード等に挙げていき、関連性のあるものをグルーピングすることで、解決方法やアイデアを発想する手法。

## 【引用・参考】

文部科学省「幼稚園教育要領」(2017)、文部科学省「幼稚園教育要領解説」(2017)

文部科学省「幼児理解に基づいた評価」(2018)、文部科学省「指導と評価に生かす記録」(2021)

アメリカ心理学者アンジェラ・ダックワース. '究極の能力', 幼児教育情報サイト CONOBAS